

第40回Kozoom28 テーマ「スポーツの日に思う」

清水健二

今年の「スポーツの日」は10月9日である。この時期、各地の学校では運動会や体育祭がとり行われている。スポーツの祭典として、1964年東京オリンピックの開会式を機に、10月10日を祝日に「体育の日」をスタートした。その後2020年「スポーツの日」に改名された。日本人のスポーツ好きは時代の要請もあって、法律の趣旨にも「スポーツを楽しみ、他者を尊重する精神を培うとともに、健康で活力のある社会の実現を願う」とある。また2011年文部科学省の外局としてスポーツ庁が設置され、「国民が生涯にわたり心身共に健康で文化的な生活を営むことができる社会を実現できる組織」を政策にしている。

日本が1964年東京オリンピック後、著しい経済成長を遂げる中でスポーツが急速に普及した。この時の東京オリンピックで「東洋の魔女」と呼ばれたニチボー貝塚のバレーボールが世界一を成し遂げた。大松博文監督率いる女性軍の活躍がスポーツへの目覚めを国民にもたらした。それより15年前の1949年、アメリカ・ロスアンゼルスで、全米水泳選手権大会で新記録を出し、「フジヤマのトビウオ」と称賛された古橋広之進氏は敗戦に打ちのめされた日本人の心にスポーツが大きな希望の灯をもたらしてくれたものである。

当時は日本人選手の体格は外国人の体格・体力よりはるかに劣っていたが、経済成長と共に食生活の向上が進み、50年の歳月を経た現在は、西欧諸国の若者達と比較しても遜色がなくなってきた。2022年の東京オリンピックは、格段に選手達の成果が上がり、世界を相手に互角に戦えることで、スポーツに対する国民の関心度も高まって来た事は言うまでもない。

ところが近年スポーツに対する国民の意識が変化しはじめ、自ら体を動かす運動への参加度は低迷して来ているという。スポーツは好き、つまりスポーツ愛好家にはスポーツを自らプレイする人と、スポーツを観戦する人があってその数は、前者の人口は減少し、後者の人口は増加してきているのが近年の傾向になってきた。少子高齢化が原因になっているが、核家族構成による親と子供の関わり方が要因だと私は思っている。例えば10～19歳に野球をする男の子は2001年に21.5%だったが2021年に12.3%まで減少している。(笹川スポーツ財団の調査による)

私の孫は現在、大学生だが小・中学時代は少年野球に興じていた。その当時から親は、所属するク



「東洋の魔女」と大松監督



「フジヤマのトビウオ」古橋広之進

ラブの運営に協力を求められたり、対抗試合には応援の参加を要請される。共稼ぎの親は出席したり 参加することは容易で無いため、徐々に少年野球に入団する子供が減少傾向になってきたという。

野球に限らず、他のスポーツ協議においても両親の支援が求められている。一方、練習時における指導が厳しかったり、怪我でもしたりすると親から抗議が殺到するから、指導員のなり手も腰が引けてきているという。私の住む地域の運動会の予行練習で、組体操が崩れて最下段の息子が耐えきれなくなって上段にいた生徒が転がって怪我をした。それを父兄が取り上げ問題視したことから教育委員会は組体操をしないよう全校区に指示を出し廃止された。廃止の是非は別にして担当教員はさぞ辛かったであろうと思う。

昔から欧米では紳士向きのスポーツとしてゴルフが普及し、日本が高度経済成長時代には企業間で仕事上の営業手段として「ゴルフ外交」が普及した。やがて個人的にも裕福になって庶民化してゴルフ人口が急増した。1994年は1450万人をピークに2021年には520万人に減少し続けている。打ちっぱなし練習場は軒並みに閉鎖に追い込まれていった。コロナ禍の影響以前からその傾向があり、プレイする人の高齢化が大きい原因だが、一方近年若者や女子のプレイヤーが増加してきたもののその期待は難しいと言われている。経済的に成長し続けてきた日本社会の構造変革と国民の生活形態の変化が起因しているからだろう。

スポーツの振興に企業の支援が、会社のイメージアップのために投資する動きが拡大し、優秀な運動選手を抱え込み、世界大会やオリンピックなどに出場できる選手を育成する方向に進んでいった。競技種目も細分化し、夫々の分野で秀でた選手を創出するため、新記録を更新するため限界を超え



組体操「ピラミッド」



2008年北京五輪開会式



2022年東京五輪開会式から

る人間技を称賛する流れに発展していったように思う。一般の人達ではとても出来ないアクロバットのな競技に、とても自分ではやれないことから、観戦する方向に転じ、勝った負けたの世界に関心が高まってきたように思う。日本古来から継続している相撲などは典型的な観戦スポーツであろう。

少子高齢化は大きく生活形態を変え、暮らしの中で青少年の教育のあり方や、運動を伴う遊びの世界も希薄になり、スポーツへ関心は観戦を中心に勝敗に興味に移ってきたように思える。私には何やらよく理解出来ないが e-スポーツ (electronic sports) という分野がオリンピックに採用される動きがあって、ゲーム会社と連携して展開するというから、いよいよオリンピックは商業化されたイベント競技になってきた事を憂う。近年オリンピック開催国は国威高揚を狙い、最大限の電子化技術を駆使して、客寄せに大きな経済効果を高めることに精力を費やしているように思えてならない。これも世界的に拡大したデジタル化の発展によるものだろう。



eスポーツの会場風景

スポーツ大会は競技する演技者と観戦する一般人が集う劇場の場になって来た。一方日常生活の中で自身の体を使って人々と交流しながら楽しみ、競技に上達の喜びを感じる事が求められている。手近な健康維持の運動に志向した、ジョギングやランニングが若者を含め日常の運動として馴染みだし、高齢者にはウォーキングや散歩をする人が増加してきている。体を動かすという人間の根源的な欲求から精神的充足感や幸福感を得ることが、スポーツという語源である「気分転換」ではないだろうかと思う。人生100年時代になって健康寿命を長らえるために、広く国民が祝日と認識するには、「スポーツの日」を「保健体育の日」という言い方が相応しいのではないだろうかと感じている今日この頃である。

令和5年10月 記